木崎愛吉旧蔵「三井寺朝鮮鐘」拓本

貫　田　　瑛

関西大学博物館の本山コレクションの一部には、木崎愛吉（好尚）旧蔵の金石文拓本資料が含まれ、「梵鐘類」の金石文拓本は200点あまりに及ぶ。なかには、記載銘を有する梵鐘のうち日本最古となる「妙心寺鐘」（京都府京都市右京区）など、貴重な拓本も多い[1]。

梵鐘は中国の鐘を祖型とし、朝鮮半島や日本でも鋳造された。日本には、日本独自の型式で造られた和鐘のほか、朝鮮半島から日本へもたらされた朝鮮鐘がある。日本の寺院でよく見かける和鐘と朝鮮鐘には、竜頭（りゅうず）と鐘身装飾に特徴的な違いが見られるという。鐘を梁にかける役割をもつ竜頭は、和鐘は双竜頭であるのに対して、朝鮮鐘は単竜頭であり、竜が首を半環状にまげて懸吊の役目を果たす。また、和鐘の鐘身は袈裟襷で覆われているのに対して、朝鮮鐘の鐘身は天人や仏・菩薩等の像を浮き出しにし、上端と下端には唐草文様などで装飾された帯が周回する[2]。和鐘と比較すると、朝鮮鐘は華やかな装飾を施して鋳造している。

今回、木崎氏旧蔵の梵鐘拓本資料のなかから、「三井寺鐘」（MY-T1881）と題される朝鮮鐘の拓本を紹介したい。この拓本の概要は次のとおりである。

【番号】MY-T1881
【年紀】太平12年（1032）12月
【員数】１枚
【拓本の法量】縦31.5×横89.7㎝
【銘文】太平十二年壬申十二月日青鳧大寺
　　鍾百七十斤大匠位金慶門棟
　　梁元善十四人戸長阮賢等
【備考】右下に方形印「好尚所蔵金石」、方形朱印「好尚所拓」
【木崎添書】「近江三井寺圓満院弗鐘　大正元年八月廿九日拓」

三井寺（園城寺）は滋賀県大津市に所在する天台宗寺門派の総本山であり、この拓本の朝鮮鐘は現在三井寺の文化財収蔵庫に展示されている[3]。銅鋳製で、総高77.2㎝、身高57.8㎝、口径50.0㎝であり、重要文化財に指定されている[4]。

拓本は「天人像」「銘文」「乳郭（ちかく）・乳（ち）」「撞座（つきざ）」の部分を１紙ごとに写しとり、４紙を継ぎ合せている。朝鮮鐘の特徴である天人像が浮き出しでつくられ、下部には唐草文様の装飾がみえる。拓本は部分的に写し取っているが、鐘の華麗さをうかがい知ることができる。

銘文は鋳崩れがあるため読みにくい字が多い。木崎氏は『大日本金石史』にて銘文を記すにあたり、判読に苦心したようである。その後、藤田亮策氏の詳細な考証を経て、坪内良平氏により銘文全体が判明した。銘文には、太平12年（1032）12月青鳧県の大寺に納められ、鐘

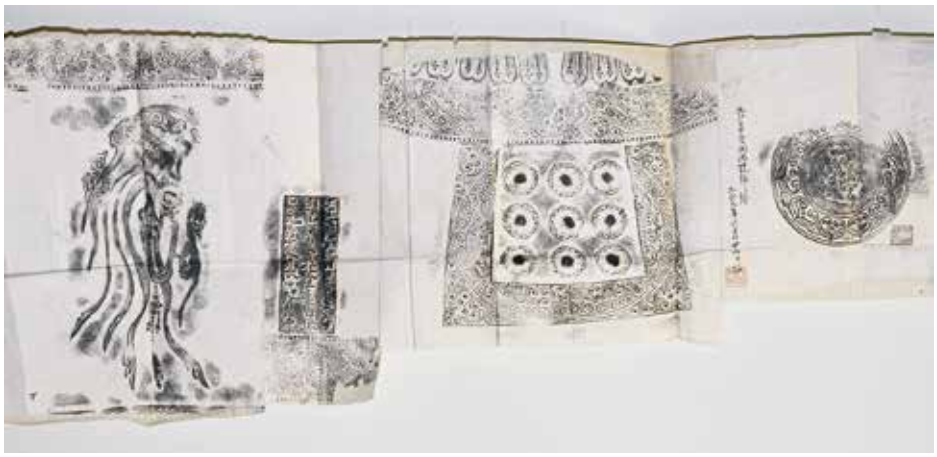

図１　三井寺朝鮮鐘、全体

図２　銘文

図３　木崎氏添書き

の総重量は170斤、鋳物師の筆頭である大匠位の金慶門、総監督である棟梁の元善ほか14人、高麗の地方職である戸長の阮賢などが鋳造に関わったことが記されている。

「太平十二年壬申」は西暦1032年、朝鮮では高麗時代の徳宗２年、日本では長元５年にあたる。太平は遼の年号であり、聖宗即位による太平の年号は10年で終わる。遼の年号を用いる場合、本来は興宗時代の重熙（ちょうき）元年に相当する。しかし、当時高麗と遼の関係は不和であったため、高麗は新しい年号を採用しない意志を示すために旧年号の太平を継続して使用した[5]。

拓本には、木崎氏により「近江三井寺圓満院弗鐘　大正元年八月廿九日拓」と添書きされる。木崎氏は、この梵鐘を手拓した時の様子を『大日本金石史』に次のように記している[6]。

> わたくしが、この鐘を手拓した時は、園城寺の金堂に陳列し、木枠を構へて、観覧者の手触はりを防いであつたので、非常に苦心したことを記憶してゐる。

木崎氏が手拓した大正元年（1912）８月29日当時、朝鮮鐘は三井寺の金堂に木枠で囲まれて陳列されていた。坪内氏も園城寺金堂内に安置されていると記しており、文化財収蔵庫に移される前は三井寺金堂内に置かれていたようである。しかし、江戸時代は違っていたようで、江戸時代の医師である橘南谿（たちばななんけい）（1753～1805）の『北窓瑣談（ほくそうさだん）』には、

> 過ぎし年三井寺塔中微妙寺開帳の時古鐘あり、芙蓉、蒙斎両子到りて其銘を打し来る。寛政七年乙卯五月蒙斎より其打せる本を借り見る。（○中略）此年六月十七日門人辻三清、森本隼人、松本六郎三士に命じ、三井寺に到りて鐘を見せしむるに微妙寺にはあらで、前年開帳の時に出せしは本坊宝蔵中の鐘なりとぞ。其鐘今に本坊金堂の傍の宝蔵に納めり。（○中略）宝蔵の封は一山の封にて、常に開くことを許さず。三士鐘を不見（みず）して空しく帰る。

とある[7]。これによると、過去の微妙寺（みみょうじ）開帳の時に古鐘があり、篆刻家（てんこくか）の高芙蓉（こうふよう）（1722～1784）と儒学者の広瀬蒙斎（ひろせもうさい）（1768～1829）が訪れたおり古鐘の銘を写した。寛政７年（1795）５月に、橘南谿は広瀬蒙斎から銘文を写した本を借覧したという。そこで、６月17日に門人３人を三井寺に派遣したが、その時微妙寺に古鐘はなかった。微妙寺開帳時に見た古鐘は、三井寺金堂の傍にある宝蔵に納める鐘であった。宝蔵は通常一山封で閉鎖されているため、門人らは古鐘を見ることができずに帰ることになる。

また、江戸時代の歴史学者である菅政友（1824～1897）は、「近江国三井寺唐院宝庫所蔵鐘」と題して、朝鮮鐘の銘文や重量などを記している[8]。菅政友のころは、三井寺唐院の宝庫に納められていたようである。

ここから、朝鮮鐘は三井寺の金堂の傍らにある宝蔵→唐院の宝庫→金堂と三井寺のなかを移動して、現在の文化財収蔵庫へ移されたことがわかる。江戸時代には金堂の宝蔵や唐院の宝庫に納められ、現在も文化財収蔵庫にて展示されているこの朝鮮鐘は、三井寺の宝物として今もなお大切にされている。

【引用参考文献】

（１）角田芳昭「関西大学考古学等資料『梵鐘拓本』資料と紀年名の記載形式について」（『史泉』53号、1979年）58～72頁。
（２）坪井良平『朝鮮鐘』（角川書店、1974年）。
（３）三井寺文化財収蔵庫〔http://www.shiga-miidera.or.jp/event/strage/index.html〕最終閲覧日：2023年1月2日。
（４）『智証大師1100年御遠忌記念　三井寺秘宝展』（日本経済新聞社、1990年）132、188～189頁。
（５）藤田亮策「高麗鐘の銘文」（『朝鮮学報』14、1959年）211～213頁。
（６）木崎愛吉編『大日本金石史』第１巻（歴史図書社、1972年）317～319頁。
（７）三浦理編『東西遊記　北窓瑣談』（有朋堂書店、1913年）68頁。
（８）『菅政友全集』（国書刊行会、1907年）616～617頁。

博物館学芸員アシスタント
関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程　在学